

ハ 第16回日本草地学会秋季大会に参加して

高知市(酪農家)

岡崎正英

夢に見た北海道、そこにいま現実に足を踏み入れたのだ。「風雪百年輝く未来」の北海道に…
第16回日本草地学会秋季大会参加という機会を得て……。

2日間にわたる、尊くも貴重な研究発表の講演、それにつづくシンポジウム、また西ドイツのクリューガ・ボンマー両博士を含めた、国際色にみちた記念講演等々、直接の勉強と、数多くの示唆が与えられ、大変意義深いものがあつた。ただ現場において実際経営をやっている一般酪農家の参加の少なかつたことは、例年のことではあるが寂しかつた、幾多の苦勞を積み重ねて来た、北海道酪農家の草づくりの体験を聞き、現実の問題点を提起して欲しかつた、そうすれば学界の皆さんや試験研究機関の方々はず、これを次の研究課題として取り上げて下さつたものと思う。

つづいて繰りひろげられたエスカッション、この草と牛を訪ねての旅は、まさに今次大会の圧巻であつたと言えよう、札幌を振出しに南に下り太平洋岸に出、更に日高一十勝を経て、根釧の大平原を通り、網走、上川の地帯を巡つて石狩の平野に帰るまで、延々実に1,160余Kmにわたる泊4日、その間、草、牛、大自然、そして糠平、養老牛、温根湯の各温泉郷での宿泊、最後に滝川畜試の特別のご好意による、ジンギスカン料理による”さよならゴンパ”しかも、時あたかも、札幌において、天皇を迎えて開道百年の記念式典の行なわれている9月2日の同時刻に、意義深いこの地でお別れパーティー……。

温泉郷の、その熱い泉と、神秘的な静かな環境が象徴しているような、各地域関係官庁と地元のご熱意とご協力には全く頭の下る思いがした。”邪心さらさら起らず”である、まことに学界の旅にふさわしい受入態勢であり、設備であつて全く感謝に耐えない。

眼前にくりひろげられた北海道の大自然、そこには広さがあり、神秘さがあり、雄大かつ繊細な姿がある、まさに造化の神の画く芸術絵図である。これは自分達の心にジーンとしみこんでいつた、やがては人間生活の中に清純な泉として、こんこんと湧きでてきて心をうるおしてくれるであろう。

そして、その大地にくりひろげられた人間開拓の歴史、遠き過去はいざ知らず、アイヌの昔から和人の開拓史、孤独と大自然のきびしい試練(現実の苦年は、とても試練などとは受け取れなかつたであろう)、夢と希望と、現実の苦難に処する心身のたたかいと、外、大自然の暴威と恵みの中に、尊い幾多のしかばねを越えながら築きあげてきた、日本人百年の、秘められた大開拓史は、自分達の心を泣かし、また勇気づけ、そしてゆさぶらずにはおかなかつた。

その間、たえず北海道の土とともにあつた草と牛の歴史、時にはその影が濃く、またうすく、その間の先人の努力には頭が下がる、この百年の積み重ねは、コロンブスの卵のように簡単に片付けるには余りにも貴重な歴史である。これが尊い、この歴史が……

この百年の歴史を土台として、北海道の草は、酪農は、草地農業は、新しい転機に立っているように思えた、経営的にも、技術的にも……、今後の百年に向かつて新しい開拓の歴史が始まっているような気がする、政策的にもまたそうあるべきではあるまいか、北海道農業の本命は、何といつても草地農業ではあるまいかと思うからである。

それには先ず、農業者自身の、内なる人間性のカルチュアーと、頭の中の知恵の開拓から始まらねばなるまい、いやそれがすでに新しい草地造成地域や開拓地の若い青年達によつて始まっていると思う、ただこの新しい芽を如何に着実に軌道に乗せて、伸ばし、かつ拡大して行くかが今後の課題であろう。北海道にはその広大な余地と、秘められた底力がひそんでいる。それは日本の底力であり、未開発の余力でもあると思つて意を強くした。

一方この立地条件の上に立つての社会的環境と条件の変化や進展に伴う、これに即応した基礎研究が、しかも現場の酪農経営の中に直結して活かされる研究が、学者や試験研究機関の皆さんにおいてドンドン開発されることを期待したい、それは日本内地（府県）においても同様大切なことである。それがためには行政的にも、かつて日本が稲作の研究に注いだくらいの情熱とあるいは、それ以上のスケールの大きい予算的措置を講じなければ、歴史的に新しい日本の草地農業を欧米諸國に追いつかすことはむづかしいと思う、しかもこれは、国際経済の見地からも、また国内的にも日本が早急に成し遂げなければならない重要な国家的大事業でさえある、というようなことを考えた。

北海道ならではと思われる、スケールの大きい勉強の場を与えられ、多大の収穫を得たことと、そして関係者の皆さんが、その設営と運営に想像以上のご苦勞をされたであろうことを思い酪農にたずさわる農業者のはしくれとして感謝に耐えない。